

2017  
おもろ  
チャレンジ

## 東アフリカのコミュニティおよびビジネス調査

経営管理教育部 専門職学位課程 1年

山平 泰子

タンザニア、ルワンダ、ケニア

2018年2月27日-

2018年4月6日



### 渡航概要と内容

東アフリカにおけるコミュニティおよびビジネスについて調べることを主眼に、タンザニア、ルワンダ、ケニアの三カ国に渡航した。タンザニアでは古くからスパイスの産地として名高いザンジバル島を訪問し、ザンジバル人の家庭にホームステイしつつ、スパイス農園、伝統的な木造帆船であるダウ船の修理や製作現場、地元の人々が集う魚のセリ市場などへ足を運んだ。滞在先はタクシー運転手の夫、専業主婦の妻、三人の息子（27才、24才、13才）という家族構成であった。長女は既に嫁ぎ、ダルエスサラームで暮らしていた。賃貸ではなく、持ち家を所有しており、タクシー1台とマイクロバス1台を所有。いずれもトヨタ車で、中古で購入し故障もほとんどなく、観光業に使っているという。シャワーは水のみで、トイレは水洗ではなかったが、居間にはテレビがありスワヒリ語のニュースやBBC、NHK 英語放送など世界のさまざまな番組が視聴出来た。近所のほぼ全ての家にもテレビがあるとのことで、ザンジバルにおいて中級所得層の人々は世界で今、何が起きているかをリアルタイムに知ることが出来、英語にもテレビを通して日常的に触れることの出来る環境にあるというのは驚きであった。

スパイス農園では、カルダモン、ブラックペッパー、シナモンなどのスパイスを始め、マンゴー、ドリアン、ジャックフルーツ、アボカド、スターフルーツ、パパイヤ、ザンジバルチェリー、ザンジバルライチ、レモン、タンジェリンなど、現在の所有者が父親から引き継いだという農園で、さまざまなスパイスやフルーツを目にし、試食もできた。クローブの輸出は政府管轄となっており、相当量が中国や



ザンジバルでスパイス農園探索

シンガポールなどに輸出されており、その他のスパイスやフルーツは、ザンジバル内での流通や消費が主となっているとのことであった。ザンジバルでは圧倒的に低～中間所得層が多い中、例えばどのようなビジネスが今後望まれるか地元の人々に尋ねてみたところ、日本製の新品の車用スペアパーツや新車、新しい自転車、モーターバイクなどは欲しくても高い。けれども日本製の中古スペアパーツ、中古自転車、中古モーターバイク、モーターボート用の中古エンジンなどがあれば、品質も良く、金額的にも手が届くためビジネスとして成立するのではないだろうかという意見が相次いだ。日本車は断トツでトヨタ車が人気とのことで、確かに道を走る車のほとんどがトヨタであった。



ザンジバルのダウ船製作現場。島に自生しているマングローブの木から作り、4人の作業員で1カ月で完成させる。

ルワンダでは市場で販売されている野菜や果物を実際に購入してみて、どの位の値段で販売されているかを調べた。トマト 1Kg—700RWF (約 90 円)、(レートは 2018 年 4 月現在 1RWF=0.127JPY で計算)、白玉ねぎ 1Kg—1000RWF (127 円)、赤玉ねぎ 1Kg—700RWF (90 円)、インゲン豆 1Kg—600RWF (76 円)、卵 1 個 120RWF (15 円) パイナップル 1 個—700RWF (90 円)、マンゴー 1 個—500RWF (64 円)、バナナ (小) 一房 (約 8 本) —1000RWF (127 円)、食用ほおずき 1Kg—2000RWF (254 円)、きのこ 1 Kg—2000RWF (254 円)、牛肉 (骨付き) 1Kg —2200RWF (280 円)、牛肉 (骨なし) 1Kg—3000RWF (381 円) 程度であった。公共交通機関であるバスは首都キガリ内であれば一路線につき 250RWF (約 32 円) で乗車できた。これまで運賃は現金払いであったが、去年から日本の Suica のような非接触型 IC カードによる支払方法が導入され、乗客は皆 IC カードを使っていた。



ルワンダの市場で購入した食用ほおずき (グースベリー)。大変甘くて美味しい。特定の産地で獲れる。写真は 500g (約 127 円)。パイナップルが 1 個約 90 円で買えることから考えると、高級フルーツといえる。先日偶然京都の八百屋で 4 粒 200 円で販売されているのを目にした。

ルワンダ政府関係者、学校関係者、企業関係者、一般の人々などに、ルワンダで今後期待できるビジネスについて聞いたみたところ、アグロビジネス、観光業、養鶏、IT など答えはさまざまであった。首都は建設ラッシュで今年だけで新たに 5 件のホテルがオープン予定など、ホテル業界はかなり競争が激しくなっているとのことであった。

ケニアでは日本企業 2 社の関係者に直接会い現地のビジネス状況などについて話を聞くことができた。アフリカにおける人材育成や日本とは文化も習慣も異なる国でのビジネスの進め方の難しさなど現場ならではの話は大変貴重なものであった。

現地ですれ違いがあったことについても触れておく。タンザニアのダルエスサラームからザンジバル島に船で向かった時のことである。現地の人々でのごった返し、スワヒリ語が飛び交うダルエスサラームのフェリーターミナルで、スーツケースを持って一人でイミグレーションを通り、乗り場まで行く必要があった。英語しか話すことができず、周りの勢いに圧倒されどのように行けばよいか不安な中、ゼッケンをつけたポーターがスーツケースを運ぶのを手伝いますと近づいてきた。ターミナルまで送ってくれたドライバーに確認すると、このポーターは政府関係者なので大丈夫とのことであったため、スーツケースを運んでもらうことにした。無事乗り場まで案内してもらえ、チップとしてお礼に1ドルを渡そうとしたところ、フェリーに積み混む荷物を管理する職員と一緒に、現地では法外な金額にあたる10ドルを要求された。払えないと断っても払わなくてはならないと半ば脅しのような態度で、5ドルを払いその場は収まったが、後味は悪く、事前に金額を確認すべきだった、安易に信用してはいけないと反省した。

またナイロビでは日中でも場所を問わず強盗が出没する可能性もあり、特に外国人は狙われやすいとのことで、たとえ5分の距離でも車を使った方が賢明とのアドバイスを現地在住の日本人の方からいただいた。このため出歩く時はひたすら歩かれる可能性のあるようなカバンは持たず、時計も外し、ポケットに小銭だけを入れて歩いた。特に危険な目には遭遇しなかったが、日本とは異なり常に緊張感にさらされている感じであった。

写真撮影についても注意する必要がある、人にはカメラを向けない、写真を撮りたい場合は相手に事前に了承を得ないと後でトラブルになる可能性がある。またカメラやスマホは高級品であり、むやみに人前で使用しない方がよい。

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

実際に現地に行くと、ニュースや本などから得ていた情報とは異なる現実の状況を肌で感じることができる。治安があまり良くないと言われるナイロビやダルエスサラームで、危険な目に遭わずに済んだのは自分が注意していたこともあると思うが、現地の人々にさまざまな場面で助けもらったということも大きいと感じている。ローカルな食堂や市場、バス乗り場などで、片言でも現地の言葉で挨拶をして意志を伝えたり、質問をしてみると、いつも周りの人たちが助けてくれた。今回渡航したことで、人の温かさや助け合う大切さを改めて感じた。

## 今回の経験をどのように今後生かしていくか

東アフリカにおける起業を視野にいれ、現地に行き、生の情報が収集できたことは非常に良かった。他方さまざまな状況を目にし、またさまざまな人々から話も聞き、どのようなビジネスアプローチが適切か、逆に考えが混とんとしてしまったのも事実である。いろいろな観点から研究や調査を重ね、注意深く計画を作っていく必要があると感じた。学術的な知見も深めつつ、一歩一歩、良いビジネスモデルを構築していきたい。

## ■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

今回三カ国に渡航したが、各国へ渡航するための複数のビザ取得が必要で時間も費用も要した。30万円という奨学金の予算を考慮すると、できるだけ一つの国に絞る方が賢明と感じられた。

海外は日本の事情とは全く異なる。特に身の安全の確保が第一であり、できるだけ無理はせず、例えば現地の空港から宿泊先までの車両手配などは信頼できるホテルや手配会社に事前に依頼しておくなど、無事に帰国するためにもリスクをできるだけ回避しておくことが重要と考える。

## ■ 主な奨学金の使途

\*渡航費・移動費

\*宿泊費・食費

\*海外旅行保険・予防接種

\*食費

\*ビザ など